

巻頭言

日本麻酔科学学会会員からみた日本循環制御医学会

島田 康弘*

本年、日本麻酔科学学会第51回学術集會を開催させていただいたものとして、日本循環制御医学会に対して思うことを述べさせていただきます。

日本麻酔科学学会は2001年に社団法人として再出発を果たし、社会に貢献するための学会としてそのミッションを確立し、年々活動を活発化させている。また現在では、手術を受けるすべての患者の麻酔に関して、麻酔科専門医が関与している状況にない現状を改善するために、麻酔科医のマンパワーについてあらゆる角度から分析し、その解決策を国民ならびに麻酔科医に提示すべく、関係各方面と意見を交わしながら提言を作成中である。そして本年度中には、これから将来に向けて日本麻酔科学学会が実行していくべき中・長期計画を作成し、学会員に議論をお願いする予定が組まれている。

翻って、日本循環制御医学会の活動を、総会および学会誌「循環制御」等を参考にして思うことを以下に述べさせていただきます。本学会は会則に明記されているとおり、「体液循環の調節機構および体液循環の管理・制御などの領域をめぐる学際的研究を通して医学の進歩に貢献すること」が目的で設立されたものである。基礎的な医学、理学、工学分野の研究を臨床医学分野における体液循環管理や制御に応用するという、まさに学際的な学会として設立され、当時はその名称の新鮮さも相まって大いに若手会員の注目を集めた。また、劔物修前理事長の下で、学会誌も学際的な内容のものを年4巻出版するという、すばらしい成果を収めてきた。このことは、他の同程度の会員数を有する学会が、学会誌出版を種々な理由で断念してき

たことと比べると画期的なことである。しかし、2年前の本誌巻頭言ですでに外現理事長がいきも危惧されておられるごとく、多くの関連する学会が存立する中で、本学会の存在意義や魅力が激しく問われるときがきたと言わざるを得ない。とくに麻酔科医からみると、日本心臓血管麻酔学会の設立は、若い人たちの意識を大いにそちらに牽引したと考える。

このたび、本巻頭言を書くにあたり、日本循環制御医学会と日本心臓血管麻酔学会のホームページを訪れてみて、その差に愕然とした。すなわち、本学会のホームページに比べて日本心臓血管麻酔学会のそれは格段に魅力的に作られている。若い人たちのほとんどはまずホームページをみて学術集會参加や特別企画への参加を決めるようである。このことは私が今回主催した日本麻酔科学学会学術集會において、とくにホームページの充実を力を入れたにもかかわらず、いろいろとご指摘、おしかりを受けたことで経験済みである。まずはこのあたりの広報関係の充実を行い、若い会員の意識をこちらに向けさせる努力を本学会に望みたい。本学会のさらなる発展を祈念し、少し苦言を呈させていただきます。次第である。

*名古屋大学大学院医学系研究科生体管理医学講座
(麻酔・蘇生医学)